

基準Ⅶ 卒業・就業・進学

観点Ⅶ-1 卒業時の到達状況を捉える方法が明確であり、それを計画的に行っているか

点検 Ⅶ-1-1 卒業時の到達状況を捉える方法が明確であり、計画的に行っている。

【観点に係る状況】

附属病院に就職を希望する者には、臨地実習を通して附属病院の物的環境・人的環境や、卒後の継続教育のあり様を理解でき、着実なキャリア開発計画を描くことができるように、卒業ガイダンスを定期的に行い方向性を示している。他の施設の就職を希望する者には、学生本人・家族との連携を図り、本人のキャリア開発計画が着実に進めることができるように、情報を提供し相談にのるなどの支援をしている。継続教育との関連として、指定規則に決められている各領域の学習を修得するだけでなく、看護師国家試験受験後、卒業までの期間を利用して数日間の“卒業前実習”をおこない、看護スタッフとマンツーマンで行動を共にし、現場の状況がリアルに体験できる機会を持っている。このことで就職後のイメージができ、リアリティショックを少しでも軽減し、職場への適応がスムーズに展開できるようにしている。また、個々の学生の“卒業時到達レベルを示す資料”として「卒業時達成度」「看護技術経験記録」「到達レベルの評価」や、対人関係能力の指標として「OSCEの評価と自己の課題」等の資料があり、卒業後も学生には、それら資料をプリセプターシップ・教育プログラムに活用してもらえるよう配慮している。免許取得にかかる指導としては、教員が組織する国家試験対策委員会をもち、学生の知的・情緒的データの分析、年度毎のデータの活用により指導の方向性を検討している。また委員会の見解を受けて、教員全員が方向性の一貫した面接や個別指導を定期的におこなっている。同時に定期的な模擬試験の実施や時期毎の集中講義、実力試験問題を作成し実施するなどの対策も立てておこなっている。

資格取得にかかる指導計画

7月	夏季直前模擬試験 国家試験対策集中講義	夏季休暇前 担当教員による個別面接 (定期外も適宜個別面接)
9月	第1回模擬試験	夏季休暇後 同 上
11月	第2回模擬試験	
12月	国家試験受験手続	冬期休暇前 同 上
1月	第3回模擬試験 国家試験対策集中講義	冬期休暇後 同 上
2月	国家試験前自宅研修	自宅研修前 同 上
3月		国家試験後 同 上

3年課程		H15 第92回	H16 第93回	H17 第94回	H18 第95回	H19 第96回	H20 第97回	H21 第98回	H22 第99回	H23 第100回	H24 第101回
現 役	受験者数	41	35	42	40	39	80	82	71	73	60
	合格者数	41	35	41	40	39	79	81	69	73	59
	不合格者数	0	0	1	0	0	1	1	2	0	1
	合格率%	100	100	97.6	100	100	98.7	98.7	97.1	100	98.3
既 卒	受験者数	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—
	合格者数	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—
	不合格者数	—	—	—	0	—	—	0	0	—	—
	合格率	—	—	—	100	—	—	100	100	—	—
2年課程		H15 第92回	H16 第93回	H17 第94回	H18 第95回	H19 第96回	閉校				
現 役	受験者数	45	39	39	43						
	合格者数	45	39	39	39						
	不合格者数	0	0	0	4						
	合格率%	100	100	100	90.7						
既 卒	受験者数	—	—	—	—	4					
	合格者数	—	—	—	—	3					
	不合格者数	—	—	—	—	1					
	合格率	—	—	—	—	75					

《資料：到達目標自己評価表・看護技術経験記録・到達レベル評価・コミュニケーション能力開発プログラムの個人の傾向と今後の課題・OSCEの評価と自己の課題》

【分析結果とその根拠理由】

卒業時の期待像に照らして、様々な側面からの評価を計画的・段階的に行い課題を明確にしている。このことで自己成長に対する達成度の認識を行うとともに、継続教育・看護職としてのキャリアデベロップメントへの一助となっていると捉えている。また看護師国家試験の合格率も教育成果として捉えている。

観点Ⅶ-2 卒業生の到達状況、就業、進学状況を分析した結果は、教育理念・教育目標と整合性があるか

点検Ⅶ-2-1 卒業時の到達状況を分析している。

点検Ⅶ-2-3 卒業生の就業・進学状況を分析している。

点検Ⅶ-2-3 卒業生の到達状況、就業、進学状況についての分析結果は、教育理念・教育目標との整合性がある。

【観点に係る状況】

卒業生の到達状況に関しては、卒業時の期待像の5つの項目を細目化し120項目の「到達目標自己評価表」

を作成し、各カテゴリーと全体の自己達成度を5段階で評価している。また、同時に、学生は看護基礎教育に対する満足度も評価している。その他、「看護技術経験記録」「到達レベルの評価」や、対人関係能力の指標として「コミュニケーション能力開発プログラムの個人の傾向と今後の課題」、「OSCEの評価と自己の課題」等の資料を、就職後、各学生が配属された部署の指導者に提示し、その後のプリセプターシップ・教育プログラムに活用してもらえるようにしている。就職、進学に関しては下記に示すとおりであり、附属病院への就職は卒業生のほぼ80%前後となっている。近年の傾向として進学希望者が増加する傾向にある。

卒業生進路状況

3年課程	就職	進学	その他	合計
平成16年度	41	1	0	42
平成17年度	36	4	0	40
平成18年度	33	6	0	39
平成19年度	71	8	1	80
平成20年度	75	3	2	80
平成21年度	66	3	2	71
平成22年度	68	5	0	73

2年課程	就職	進学	その他	
平成16年度	38	1	0	39
平成17年度	41	1	1	43
平成18年度	閉鎖	-	-	-

【分析結果とその根拠理由】

卒業生の到達状況、就業、進学状況は把握しており、卒業時の到達状況は教育理念・教育目標と整合性を基に分析している。進路に応じたその後の能力開発へ継続されているか今後データ収集・分析が必要である。

観点VII-3 卒業生の就業先での評価を把握し、問題を明確にし、教育を改善するために、就業先との情報交換や調査の実施などができる体制を整えているか

点検VII-3-1 卒業生の就業先での評価を把握し、問題を明確にしている。

点検VII-3-2 卒業生の就業先との情報交換や調査の実施などができる体制を整えている。

【観点に係る状況】

学校運営会議等において情報交換を行い、問題点を把握し、その後カリキュラム委員会を基に教育内容の見直し検討を行い改善に繋いでいる。

【分析結果とその根拠理由】

卒業生の就業先での評価に対する情報は、問題が発生した場合等随時情報を得ている。今後は調査体制を整備して、定期的の実態を捉え分析し検討することが必要である。

観点Ⅶ-4 卒業生の活動状況を把握し、統計的に整理し、教育理念・教育目的、教育目標、授業の展開に活用しているか

点検Ⅶ-4-1 卒業生の活動状況を把握し、統計的に整理している。

点検Ⅶ-4-2 卒業生の活動状況の分析結果を、教育理念・教育目的、教育目標、授業の展開に活用している。

【観点に係る状況】

該当するデータなし

2. 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

個々の学生の“卒業時到達レベルを示す資料”として、「卒業時達成度」「看護技術経験記録」「到達レベルの評価」や、対人関係能力の指標として「コミュニケーション能力開発プログラムの個人の傾向と今後の課題」、「OSCEの評価と自己の課題」等の資料を、就職後、各学生が配属された部署の指導者に提示し、その後のプリセプターシップ・教育プログラムに活用してもらえるようにしている。

卒業時の期待像に照らして、様々な側面からの評価を計画的・段階的に行い課題を明確にしている。このことで自己成長に対する達成度の認識を行うとともに、継続教育・看護職としてのキャリア開発プログラムの一助となっており、看護師国家試験の合格率も高い。卒業生の到達状況、就業、進学状況は把握しており、卒業時の到達状況は教育理念・教育目標との整合性を基に分析している。着実なキャリア開発計画を描くことができるように、卒業ガイダンスを定期的に行い方向性を示している。継続教育との関連として、指定規則に決められている各領域の学習を修得するだけでなく、看護師国家試験受験後、卒業までの期間を利用して数日間の“卒業前実習”をおこない、就職後職場への適応がスムーズに展開できるようにしている。

【改善を要する点】

卒業生の到達状況、就業、進学状況は把握しており、卒業時の到達状況は教育理念・教育目標との整合性を基に分析している。卒業生の就業先での評価に対する情報は、問題が発生した場合等随時情報を得ている。今後は調査体制を整備して、定期的の実態を捉えて分析し検討することが必要である。

卒業生の多くは、本学大学病院へ就職する。就職後大学病院の看護師としてのキャリアアップとともにそれぞれライフサイクルに入って行くが、結婚・妊娠・出産のようなライフサイクルのポイントと職業人としてのキャリアを両立させていく必要がある。また、就職後、認定看護師の資格を得るためのコースを選択し、キャリアアップして行く卒業生も少なくない状況である。本学附属病院への就職後は、情報が入りやすく、卒業生の活動状況を把握しやすい。

3. 基準Ⅶの自己評価の概要

卒業生の到達状況に関しては、卒業時の期待像に照らして、卒業時の期待像の5つの項目を細目化し120項目の「到達目標自己評価表」を作成し、各カテゴリーと全体の自己達成度を5段階で評価を行い、計画的・段階的に課題を明確にしている。同時に卒業ガイダンスを定期的に行い方向性を示している。

継続教育との関連として、指定規則に決められている各領域の学習を修得するだけでなく、看護師国家試験受験

後、卒業までの期間を利用して数日間の“卒業前実習”をおこない、看護スタッフとマンツーマンで行動を共にし、現場の状況がリアルに体験できる機会を持っている。個々の学生の“卒業時到達レベルを示す資料”として、「卒業時達成度」「看護技術経験記録」「到達レベルの評価」や、対人関係能力の指標として「コミュニケーション能力開発プログラムの個人の傾向と今後の課題」、「OSCEの評価と自己の課題」等の資料を、就職後、各学生が配属された部署の指導者に提示し、その後のプリセプターシップ・教育プログラムに活用してもらえるようにしている。継続教育・看護職としてのキャリア開発への一助となっていると捉えている。

免許取得にかかる指導としては、教員が組織する国家試験対策委員会をもち、学生の知的・情緒的データの分析、年度毎のデータの活用により指導の方向性を検討している。また委員会の見解を受けて、教員全員が方向性を一貫した面接や個別指導を定期的におこなっている。同時に定期的な模擬試験の実施や時期毎の集中講義、実力試験を作成し実施するなどの対策もおこなっており、看護師国家試験の合格率は全国平均と比べると高い。学校運営会議等において卒業生の8割が就職する附属病院と情報交換を行い、問題点を把握し、その後カリキュラム委員会を基に教育内容の見直し検討を行い改善に繋いでいる。